

## 契丹語の奉仕表現†

大竹昌巳

【要旨】本稿では契丹小字文獻に見られる動詞句「几卡 尺-」*kūs uy<sup>w</sup>-*の讀解を通じて「几卡」*kūs*の表はす意味を明らかにする。この動詞句は中期モンゴル語に並行的な表現が見られ、讀解の上で大きな助けとなる。

### 1. 「几卡 尺-」*kūs uy<sup>w</sup>-*の意味

王弘力 [1986: 62] は契丹小字『蕭仲恭墓誌銘』〔天德2年(1150)刻〕第2行の、墓主仲恭の祖父蕭兀納に関する次の記述：

- (1) 乍 中 谷金当 令生百岑 尺 杰 字夫 土化 ◆尺及 傘出 主 玉兩 几卡  
尺北 又为夫 丹カ 为中 伞引本 羽和 伞为本<sup>(1)</sup>

と『遼史』卷98「蕭兀納傳」の記述：

- (2) 蕭兀納，一名撻不也，字特免。[……] 清寧初，[……] 補祗候郎君。

との比較から、「几卡 尺北」*kūs uy<sup>w</sup>el*が「祗候」すなはち「近侍」に對應するとみなし、「尺及 傘出 主 玉兩 几卡 尺北 又为夫 丹カ 为中」*dau<sup>o</sup> zūŋ<sup>w</sup> qoŋ<sup>w</sup> dīn kūs uy<sup>w</sup>el šāl bāq āi*を「曾爲道宗皇帝之近侍郎君官」と解釋した<sup>(2)</sup>。即實 [1996: 106f] も「几卡」を「貼身，近身」，「尺北」を「侍」として同一箇所を「曾任道宗皇帝之近侍郎君」と譯解してゐる。

「又为夫」*šāl*が漢文中で「郎君」と意譯される（或いは「沙里」と音譯される）語であることは夙に明らかにされてをり [清格爾泰等 1978: 377, 1985: 117]，王弘力は「几卡 尺北 又为夫（丹カ）」が漢語の「祗候郎君」に對應するとみたが故に「几卡 尺北」を「近侍（祗候）」と解釋したのであるが，この推論は妥當ではない。

例へば，漢字『蕭和（蕭陶隗）妻耶律氏（秦國太妃）墓誌銘』〔重熙14年(1045)刻〕

† 本研究はJSPS科研費（特別研究員奨励費26・3830）の助成を受けたものである。

(1) ◆は闕字を表はす。

(2) 王弘力 [1986: 61] は「丹カ」*bāq*を「官」と解釋するが，この語は現在では「子」を表はすと考へられてゐる [豊田 1986b: 5ff, 2000: 212, 即實 1988b: 55ff]（なほ，豊田 [1986b] の漢譯である豊田 [1991c] では該當箇所が省略されてゐる）。ただし，その複數形「丹引出」*baqai*については王弘力 [1986: 66] も正しく「子嗣（複數）」と解釋してゐる。

が墓主秦國太妃の孫たちの現況について語る中に「朮者、左祇候郎君將軍<sup>(3)</sup>」との記述を見ることができるが、それに対応して契丹小字『蕭知微（蕭朮哲（朮者））墓誌銘』〔乾統 7 年（1107）刻〕第 6-7 行には墓主朮者が重熙 14 年に「朮兀朮 及化 又朮夫谷 全各女」*čegen üd šāled säjun* となつたことが記されてゐる。「朮兀朮」*jegen* は「左」の意（cf. WMo. *jegün*, MMo. *je'ün*）〔即實 1996: 658〕、「及化」*ūd* は語義未詳だが方位詞の後ろに現はれて後続の名詞を修飾する機能をもつ形容詞、「又朮夫谷」*šāled* は「又朮夫」*šāl* の複数形で「郎君班」に対応し、「全各女」*säjun* は「詳穩」と音譯される、漢語「將軍」に起原すると見られる語である〔王弘力 1986: 62〕（cf. OTu. *sajun / säjün*）。契丹小字墓誌では他にも「右祇候郎君班詳穩」に相当すると考へられる「丹左朮 及化 又朮夫谷 全各女」*bārān üd šāled säjun*（「丹左朮」*bārān* は「右」の意（cf. WMo. *baragun*, MMo. *bara'un*）〔即實 1996: 658〕や「祇候郎君班詳穩」に相当すると考へられる「又朮夫谷 全各女」といふ職名が確認されるが、いずれも漢語の「祇候」に対応する表現をもたず、職名中の「祇候」がその職掌を考慮して補足されたものにすぎないことが分かる。

また、「兀朮 尺朮」*kūs uy'el* は動詞句「兀朮 尺-」*kūs uy'-* に副動詞接尾辭「-朮」*-el*〔清格爾泰等 1977: 88f, 1985: 143f〕が接尾したものであるが、この動詞句は「又朮夫 丹朮」以外の官職とも共起し、その他の文脈でも使用される。

- (3) 朮 兀朮 尺朮 全各女 兀朮 尺朮 及化 又朮夫 丹朮 仍关  
 ... *ordlakar aġ-s-ēr kūš uy'-ur ō-ġ šāl bäq bey-ĭ*,  
 重熙<sup>(4)</sup> 年-PL-INST<sup>(5)</sup> KŪS UY<sup>w</sup>-R<sup>(6)</sup> 就<-CNJ<sup>(7)</sup> 郎君 子 就<-CNJ<sup>(8)</sup>

「重熙年間〔1032-55〕に *kūs uy'-* に就いて *šāl bäq* に補せられて、」【承規 19-20】

- (4) 朮 兀朮 尺朮 兀朮 尺朮 及化 兀朮 尺朮 又朮夫 仍关  
*eür ... dur-end kūš uy'-ur ō-ġ dor paġsĭ-n šāl bey-ĭ*,  
 齡<sup>(9)</sup> 20 4-DAT KŪS UY<sup>w</sup>-R 就<-CNJ 印 牌子-GEN 郎君<sup>(10)</sup> 就<-CNJ

「齡 24 にして *kūs uy'-* に就いて牌印郎君に補せられて、」【高十 14】

- (3) 「祇候郎君將軍」は漢文資料では一般に「祇候郎君班詳穩」または「祇候郎君詳穩」と表記される。  
 (4) 盧迎紅、周峰 [2000: 44] に據る。  
 (5) ここの造格は、幅のある期間を表はすモンゴル語とも共通の用法。  
 (6) 動詞接尾辭 *-r* の統語的機能や意味・用法については後考を期したいので、ここでは假に *-R* と表記しておく。  
 (7) 動詞「及-」*ō-* の意味には定説がない。ここではモンゴル語の WMo. *sagu-*, WMo. *orosi-* に近い意味を推定しておく。  
 (8) 動詞「仍-」*bei-* は「及-」*ō-* に凡そ似た意味をもつとみられる。  
 (9) 豊田 [1990: 7] に據る。  
 (10) 「兀朮 尺朮 又朮夫」が漢文資料中の「牌印郎君」に当たることは、契丹小字『耶律敵烈（迪烈）墓誌銘』〔大安 8 年（1092）刻〕第 14-15 行の「重熙十五丙戌年初めて興宗皇帝

- (5) 父 米井及肉 尺安及 几卡 尺安 及忒 全杏 𠂔关 穴 仍关  
*mā ordūsōñ daurer kūś uy-ur ō-ī suñ nār-ī naj bey-ī,*  
 大安<sup>(11)</sup> 中 KŪS UY<sup>w</sup>-R 就く-CNJ 夜 日-GEN 頭<sup>(12)</sup> 就く-CNJ

「大安中〔1085-94〕, *kūs uy<sup>w</sup>-* に就いて宿直官に補せられて,」【承規 13】

- (6) 又北欠伏 𠂔及 凡 来土火 又同 全虫 尺同 全虫女 非木 几卡 尺火  
*Morquñ Guyū šī čeuṇ<sup>w</sup> Šiṇ sūṇ<sup>w</sup>, Kiṇ sūṇ-un pō-nd kūś uy-uj*  
 磨魯董 古昱 侍 中<sup>(13)</sup> 聖 宗 興 宗-GEN 時-DAT KŪS UY<sup>w</sup>-CNJ

込 令欠𠂔 又关丸𠂔 关化全𠂔 𠂔央及北  
*öl toq-od šī-d-en īr-s-ēr yaw-ōr.*  
 多くの<sup>(14)</sup> ? -PL 使-PL-GEN<sup>(15)</sup> 稱號-PL-INST 行なふ-PST.M<sup>(16)</sup>

「磨魯董・古昱侍中は聖宗、興宗の御世に *kūs uy<sup>w</sup>-* して幾多の節度使の稱號の下に務めを果たした。」【兀没 7】

---

に *kūs uy<sup>w</sup>-* に就いて, [……]「𠂔 𠂔𠂔𠂔𠂔 又𠂔𠂔」に補せられて」との記述と、『遼史』卷 96「耶律敵烈傳」の「重熙末, 補牌印郎君」との比較から論證される〔盧迎紅、周峰 2000: 44〕。「𠂔」*dor*「印; 禮」については劉鳳翥、王雲龍〔2004: 70-72〕。定説では「𠂔𠂔𠂔𠂔」*paisī* を漢語「牌司」の音譯とみるが、この説は採らず、「牌子」の音譯と考へる。

- (11) 盧迎紅、周峰〔2000: 43f〕に據る。  
 (12) 「全杏 𠂔关 穴」が「宿直官」に當たることは愛新覺羅〔2004: 157〕が早くに推測してゐるが、契丹小字『蕭敵魯古墓誌銘』〔天慶 4 年 (1114) 刻〕第 3-4 行の、墓主の五世祖蕭撻凛に關する記述「天授皇帝の御世〔947-51〕に *kuṇus uy<sup>w</sup>-* [*kūs uy<sup>w</sup>-* の非正書法的綴字] して初めに就いてすぐ「全杏 𠂔关 穴」に補せられて」と、『遼史』卷 85「蕭撻凛傳」の「保寧〔969-979〕初, 爲宿直官」との比較によつて論證できる〔康鵬 2011〕（「天授皇帝の御世」は「天贊皇帝の御世〔969-982〕」の誤記とみられる）。なほ、「全杏」*suñ* が「夜」(cf. WMo., MMo. *sōni*) を表はすことは豊田〔1990: 7, 14, 1991a: 16, 20, 24〕, 劉鳳翥等〔1995: 324f〕。  
 (13) 「磨魯董・古昱侍中」は『遼史』卷 92 に立傳される耶律古昱であり、聖宗・興宗朝で地方官を歴任した〔蓋之庸等 2008: 84f〕。「耶律古昱, 字磨魯董。[……] 開泰間, 爲烏古敵烈部都監。會部人叛, 從樞密使耶律世良討平之, 以功詔鎮撫西北部。教以種樹、畜牧, 不數年, 民多富實。中京盜起, 命古昱爲巡邏使, 悉擒之。上親征渤海, 將黃皮室軍, 有破敵功, 累遷御史中丞, 尋授開遠軍節度使, 徙鎮歸德。〔重熙〕二十一年, 改天成軍節度使, 卒于官, 年七十, 贈同中書門下平章事。」  
 (14) 吳英喆〔2007: 87, 181〕に據る。  
 (15) 「令欠 𠂔关」が「節度使」を表はすことは漢字『耶律宗教墓誌銘』と契丹小字『耶律宗教墓誌銘』〔重熙 22 年 (1053) 刻〕との比較から推定されて以來定説となつてゐる〔劉鳳翥等 1995: 336, 劉鳳翥 2010: 207〕。ここではその複數形が用ゐられてゐる。  
 (16) 「𠂔央」*yau-* は WMo., MMo. *yabu-* との同源語と推測する。契丹語に性・數の一致が存在することについては愛新覺羅〔2004: 183f〕等。

- (7) 又及 半关 付兩 兆 北半中 几卡 了 尺矣  
*mō lī bīn šī Orelber kūś ... uy<sup>w</sup>-ēr.*  
 大きい.M<sup>(17)</sup> 禮 賓 使 訛里本 KŪS NEG UY<sup>w</sup>-PST.M

「一番上の兄弟禮賓使訛里本は *kūś uy<sup>w</sup>-* しなかつた。」【弘本妻 7】

- (8) 又安 又为夫 几卡 又矣 了 及矣 土矣 一 忝矢 令矣半及  
*Šeŋ šāl kūś ū-r ... ō-ī eŷr ... iš-end tey-eler.*  
 ? 郎君 KŪS UY<sup>w</sup>-R<sup>(18)</sup> NEG 就<-CNJ 齡 30 9-DAT 死ぬ-PST.M<sup>(19)</sup>

「*Šeŋ* 郎君は *kūś uy<sup>w</sup>-* に就かずに齡 39 で亡くなつた。」【糺里 6-7】

(3), (4), (5) の場合、後續の文脈が、牌印郎君や宿直官といった『遼史』「百官志」の謂はゆる著帳官や御帳官所屬の、帝の身邊で奉仕する役職に就いたと續くので、「几卡 尺-」を「帝の側近くに仕へる」と解釋する餘地もあるが、(6) の節度使のやうな地方官名が後續する文脈ではその解釋は成り立ちがたい。

(6) のやうな文脈でも成立するためには、「帝の側近く」といふ限定を取り拂つて、愛新覺羅 [2011: 49] がそのやうに意譯するやうに、「仕へる」と解釋すべきである。(7) や (8) のやうな否定の文脈も、「帝の側近く」といふ限定的な要素を假定しない方が理解しやすい。

さらに、次のやうな例にも注目しなければならない。

- (9) キ 百矢 几卡 尺矣  
*ai mē-nd kūś uy-ur*  
 父 母-DAT 仕へる-R

「親に仕へる」【忽突董 22】

- (10) 丹用仍 百矢 仇卡 尺矣  
*bilbej mē-nd kūś uy-ur*  
 未亡人<sup>(20)</sup> 母-DAT 仕へる-R<sup>(21)</sup>

「寡婦の母に仕へる」【玦 12】

(17) 「大きい」を表はす語に性による使ひ分けのあることは、豊田 [1991b: 1f], 愛新覺羅 [2004: 179f], 吳英喆 [2005]。

(18) 「几卡 又矣 *kūś ū-r* は「几卡 尺矣 *kūś uyur*」の非正書法的綴字。同文が契丹小字『耶律蒲速里墓誌銘』〔乾統 5 年 (1105) 刻〕第 6 行に見えるが、「几卡 尺矣」と綴られてゐる。

(19) 「令矣-」*tey-* が「亡くなる」を表はすことは劉鳳翥等 [1995: 314], 陳乃雄、楊傑 [1999: 77]。

(20) 卽實 [2012: 43, 79] に據る。WMo. *belbesün*, MMo. *belbisün* と同源。

(21) 「仇卡」*kūś* は「几卡」*kūś* に同じ。「仇」*kū* と「几」*kū* の使ひ分けは明らかでない。

- (11) 字夫 土化 女及 火关 兀住尅 几卡 尺安  
*äjüq<sup>w</sup>* *eü-d* *urü* *uy-ī* *gül-en* *kūs* *uy-ur*  
 小さい<sub>F</sub><sup>(22)</sup> 齡-DAT<sup>(23)</sup> 媳<sup>(24)</sup> 行く-CNJ<sup>(25)</sup> 姑-ACC<sup>(26)</sup> 仕へる-R

「幼い頃に嫁入りして姑に仕へる」【仲恭 27-28】

これらの例は「几卡 尺-」*kūs uy-* が「仕へる」を意味するといふ假説を支持するとともに、その概念が主君に奉仕するだけでなく親などに奉仕することをも包含することを明らかにする。

ここで冒頭の文 (1) の解釋に戻ると、結局のところ「又尅夫 丹力」*šāl bäq* が「祇候郎君」に對應してゐることが分かる<sup>(27)</sup>。

- (12) 至 中 企企尅 令至百尅 尅 尅 字夫 土化 ◆尺及 全主 主 至丙  
*ab* *aj* *Dēmēn* *Tabyēr* *taĭ* *oŋ<sup>w</sup>* *äjüq<sup>w</sup>* *eü-d* *Daü<sup>Q</sup>* *zūŋ<sup>w</sup>* *qoŋ<sup>w</sup>* *dī-n*  
 祖 父 特免 撻不也 大 王 小さい<sub>F</sub> 齡-DAT 道 宗 皇 帝-ACC<sup>(28)</sup>
- 几卡 尺北 又尅夫 丹力 尅中 全引本 羽尅 全尅本  
*kūs* *uy<sup>w</sup>-ēl*, *šāl* *bäq* *ā-ĭ* *saqar* *uĵen* *sā-ar*.  
 仕へる-CNJ 祇候郎君 ある-CNJ 宮廷 中<sup>(29)</sup> 居る-PST.M<sup>(30)</sup>

「祖父特免・撻不也大王は幼い頃に道宗皇帝に仕へ、祇候郎君として宮中に居た。」【仲恭 2】

- (22) 愛新覺羅 [2002: 40f] に據る。「小さい」を表はす語に性による使ひ分けのあることは、愛新覺羅 [2004: 181]。ここでは被修飾名詞の「土化」*eü-d*「齡（與位格形）」が女性名詞であるために女性形をとつてゐる。
- (23) *eü-d* は *eür*「齡」に與位格接尾辭 *-d* が附いた形式。
- (24) 愛新覺羅 [2003: 6, 2004: 99] に據る。cf. WMa. *urun*
- (25) 動詞「火」*uĵ-* は暫定的に「行く」と譯しておくが、正確な意味については後考を俟ちたい。
- (26) 卽實 [2012: 149] に據る。なほ、契丹語では特定の環境で與格と對格の交替が見られる。例へば、(10) と「止用仍 百公 几卡 及女」*pilbeĭ mē-n kūś ū-r*「寡婦の母に仕へる」【彦弼 26】における *mē-nd*「母（與位格形）」～*mē-n*「母（對格形）」。この *gül-en*「姑（對格形）」も *gül-end*「姑（與位格形）」と同じ機能を果たす。
- (27) 『遼史』列傳に據れば、契丹人貴族の子弟が出仕して初めに就く官職は祇候郎君が最も多く、次いで牌印郎君、さらに護衛、宿直官、本班郎君が續く。このうち契丹小字表記が判明してゐないのは祇候郎君のみであり、契丹小字墓誌において仕官後初めの官職としてよく現はれる「又尅夫 丹力」を「祇候郎君」に比定するのはこの點からも妥當と言へる。
- (28) この對格が與格と同じ機能を果たすことは註 26。
- (29) 「全引本 羽尅」*saqar uĵen* が「宮中」を表はすことは、漢字『耶律承規（迪烈）妻蕭氏墓誌銘』[大安 7 年（1091）刻] の記述：

遼寧・迪里姑南宰相、韓王，[……] 曾在聖宗皇帝宮中爲養子。

および『遼史』卷 82「耶律滌魯傳」の記述：

滌魯，字遼寧，幼養宮中。[……] 聖宗子視之。

2. 「几卡 尺-」 *kūs uy<sup>w</sup>*- の語構成

前節でみたやうに、動詞句「几卡 尺-」 *kūs uy<sup>w</sup>*- は全體として「仕へる」といふ意味をもつと推察される。續いて、「几卡」 *kūs* と「尺-」 *uy<sup>w</sup>*- がそれぞれどのやうな意味をもつのかを明らかにする必要がある。

まず「尺-」 *uy<sup>w</sup>*- については、即實 [1988a: 75] が WMo., MMo. *ög-* の同源語とみて「與へる」を意味すると推定し、定説となつてゐる。

- (13) 丕同 升灸 凡相 又化 令金百 凡火 未相 宅 北凡空 丕为本 丕丙  
*piŋ jāŋ šī-n īr tēm-ej guŋ<sup>w</sup> čen dur ...g-ed pār pin*  
 平 章 事-GEN 稱號 加へる-CNJ 功 臣 4 字-PL ? 戸<sup>(31)</sup>

戈 矣 尺矣  
*taŋ māj uy<sup>w</sup>-ēr.*  
 5 1000 與へる-PST.M

「[皇帝は仁先に] 平章事の號を加授し、功臣四字、食邑 5000 戸を與へた。」【仁先 13】

- (14) 又化 令丙刃伏 杰木 尺矣  
*mir Tēuren ōŋ-ond uy<sup>w</sup>-ēr.*  
 馬 糺隣 王-DAT 與へる-PST.M

「[皇帝は] 馬を糺隣王（耶律仁先）に與へた。」【仁先 33】

と契丹小字『耶律承規（迪烈）墓誌銘』〔乾統元年（1101）刻〕第 7 行の記述：

全女伏 令用久 尽 杰 [……] 土安 宅 令化 又安 全火 主至 丹力 丕及子丕中  
*Sunen Tilug<sup>w</sup> tai oŋ<sup>w</sup> eŋr ... ...ud Šeŋ suŋ<sup>w</sup> qoŋ<sup>w</sup>dī bäq pōl-aŋ-aj*  
 遵寧 滌魯 大王 齡 10 4-DAT 聖 宗 皇帝 子 なる-CAUS-CNJ

夾火 全刊本 羽相 肉寸丕中 土矣矣矣  
*au-ŋ saqar uŋen ā-laŋ-aj eŋr-eŋ-ēr.*  
 取る-CNJ 宮廷 中 ある-CAUS-CNJ 育つ-CAUS-PST.M

「遵寧・滌魯（遼寧・迪里姑）大王は、[……] 齡 14 にして聖宗皇帝が養子にして（lit. 子として取つて）宮中に居させて養育した。」

との比較から論證される。

(30) 豊田 [1991a: *pass.*], 即實 [1996: 483, *pass.*] に據る。

(31) 「丕为本 丕丙」は漢語の「食邑」に相當する表現 [朱志民 1995, 劉鳳翥等 1995: 321ff]。

- (15) 来化当 舟カ 捺 カ立出カ木 又及 丈木 几火矣 丞舟矢  
*čŭ-dēn bāq Qūdūq<sup>w</sup> nǎk-ańēr-en mō aĵ-en Kūŋur tajb-end*  
 2-ORD.F<sup>(32)</sup> 子 胡觀古 母方親族-PL-GEN<sup>(33)</sup> 大きい.M 翁-GEN 控骨里 太保-DAT

尺早岑当

*uy-uley-ēn.*

與へる-PASS-PST.F<sup>(34)</sup>

「次女胡觀古は國舅大翁帳の控骨里太保に嫁いだ (lit. 與へられた)。」【宗教 21-22】<sup>(35)</sup>

「嫁ぐ」を契丹語では「尺-」*uy<sup>w</sup>*- に使役・受動接尾辭<sup>(36)</sup>を附した「尺早岑-」*uyuley-* で表現するが、中期モンゴル語でも *ög-*「與へる」に受動接尾辭を附した *ögte-* で表現する。このことは「尺-」*uy<sup>w</sup>*- が MMo. *ög-* に對應することを示唆する。

また、契丹小字『蕭彥弼(蕭大山)、妻耶律氏(永清公主)夫妻墓誌銘』〔壽昌元年(1095)刻〕第7行に見える「突 尺岑 主王」(天が授けた皇帝)はその系譜記述から世宗耶律阮(兀欲)を指すことが分かるが、世宗には「天授皇帝」の尊號がある [cf. 即實 1988a: 75, 盧迎紅、周峰 2000: 49]。同墓誌銘第5行に見える「兀矣 尺岑 主王」(國を讓つた皇帝)もその系譜記述から義宗耶律倍(突欲)を指すことが分かるが、義宗は「讓國皇帝」の諡號を贈られてゐる [愛新覺羅 2006: 223]<sup>(37)</sup>。ここからも「尺-」*uy<sup>w</sup>*- が「授ける、讓る」の意味をもつことが明らかとなり、モンゴル語 *ög-* の意味によく合致することが分かる。

なほ、「尺-」*uy<sup>w</sup>*- はこのやうに能動文で與へ手を主語とする動詞であるが、この動詞と對になる、受け手を主語とする動詞として「夫-」*al-* がある [即實 1996: 231f, 458]。

- (16) 女兀木 及化 今文考 安丙 火关 傘丹 兀亦 今关 又矣 並考 叔半 兀火  
*jegen ūd sēn ŋëu uĵ<sup>o</sup> zāŋ gūn, sī šuĵ kēn kaj guĵ*  
 左 ? 千 牛 衛 將 軍 漆 水 縣 開 國

(32) 「2」を表はす語幹 *jūr-* に序數詞接尾辭 *-dēr* (cf. WMo. *-dUgAr*, MMo. *-dU'Ar*) の女性形 *-dēn* が附いたもの。序數詞に性による使ひ分けのあることは、豊田 [1991b: 1f], 愛新覺羅 [2004: 179f], 吳英喆 [2005]。

(33) 名詞語幹 *nǎk-* (cf. WMo. *nagaču*, MMo. *naqaču*) に複數接尾辭 *-ńēr* の附いた形式 [愛新覺羅 2004: 144] で、特に「國舅帳」を指す [即實 1982: 11, 1996: 101f]。

(34) 「尺早岑-」*uyuley-* が「嫁ぐ」を表はすことは即實 [1988b: 59ff]。

(35) 漢字『耶律宗教墓誌銘』における對應箇所は「女二人。[……] 次曰胡觀古，適於國舅阿沒郎君男控骨里太尉婦。」

(36) 契丹語で使役態と受動態が同一形式で表はされることは愛新覺羅 [2004: 170] に指摘がある。

(37) 「九月壬子朔，葬嗣聖皇帝於懷陵。丁卯，行柴册禮，群臣上尊號曰天授皇帝。大赦，改大同年爲天祿元年。追諡皇考曰讓國皇帝。」【『遼史』卷5「世宗紀」】

カ乃 令企半谷百 止内本 止雨 包 弔 去岑  
*nām tēm-ley-ej pār pin qūr jaṁ al-ēr.*  
 男 加へる-PASS-CNJ ? 戸 3 100 受ける-PST.M

「[弘用は] 左千牛衛將軍・漆水縣開國男を加授され、食邑 300 戸を賜はつた。」【弘用 8】

(17) 全雨 九火 去 全雨 九火 丞 止关雨 关化全 去半来  
*sin guj oŋ<sup>w</sup>, sin guj taj pī-n īr-s al-lej.*  
 秦 國 王 秦 國 太 妃-GEN 稱號-PL 受ける-PST.PL

「[知微夫妻は] 秦國王、秦國太妃の稱號を賜はつた。」【知微 17】

(18) 女化岑 令生百岑 今 又为 矣 冬本 主 令关关 穴岑 百公 女化当  
*jū-dēr Tabyēr pū mā ... asar qoŋ<sup>w</sup> tī<sup>0</sup>, newē mē-n jū-dēn*  
 2-ORD.M 撻不也 駙 馬 清寧 皇 帝<sup>(38)</sup> 地 母-GEN<sup>(39)</sup> 2-ORD.F

丹カ 全关 九火 九火 女火女 去半又  
*bāq Sī guj guj<sup>w</sup> jū-n al-ler.*  
 子 齊 國 公 主-ACC 受ける-PST.M

「二番目の兄弟撻不也は道宗皇帝、皇后の次女齊國公主の降嫁を受けた (lit. 公主を賜はつた)。」【弘用 15】<sup>(40)</sup>

一方、「几カ」*kūs* については、愛新覺羅・吉本 [2012: 209] が「入仕」という單語を、契丹文は 几カ 尺火 *kusū u-ui* を用いて表示し、直譯すれば「官を授ける」であると述べて「几カ」を「官」と解釋してをり、吳英喆 [2012: 13] も「官職」と解釋する説を提出してゐる。しかし、臣下が皇帝に官を授けるといふのは主客轉倒である。もしも「几カ」が「官職」を意味するのであれば、「几カ 尺-」*kūs uy<sup>w</sup>*- (官職を授ける) ではなく、受身形の「几カ 尺早岑-」*kūs uyuley-* (官職を授けられる) 或いは「几カ 去-」*kūs al-* (官職を授かる) でなければならない<sup>(41)</sup>。また、「几カ」を「官職」と解釋する假説は (9), (10), (11) のやうな用法も考慮してをらず、受け入れることができない。

(38) 「矣 冬本」は道宗朝の年號清寧 [1055-64] を指し、「清寧皇帝」は道宗を指す。

(39) 「穴岑 百」*newē mē* 「地母」は「皇后」の尊稱。「遼因突厥，稱皇后曰「可敦」，國語謂之「臧俚塞」，尊稱曰「耨斡麼」，蓋以配后土而母之云。」【『遼史』卷 71 「后妃列傳」】，「耨斡麼 (\**neu.ue.mue*) 「麼」亦作「改」。「耨斡」，后土稱。「麼」，母稱。」【『遼史』卷 116 「國語解」】

(40) 『遼史』卷 65 「公主表」に道宗皇帝・宣懿皇后の次女「糺里」について「封齊國公主，進封趙國。下嫁蕭撻不也。」とあり，卷 99 「蕭撻不也傳」に「尙趙國公主，拜駙馬都尉。」とある。

(41) 加へて後者の場合は，與へ手は奪格形で表はされなければならない。



では、「兀卡」*kūs* にどのような意味を想定するのがよいであろうか。ここで「兀卡」*kūs* の意味推定の端緒として、契丹語と系統を同じくするモンゴル語において「仕へる」がどのように表現されるかを調べてみよう。

### 3. 中期モンゴル語における奉仕表現

中期モンゴル語で「仕へる」が如何に表現されるかを知るためには、先古典期モンゴル文語の文献資料であるモンゴル語訳『孝經』が恰好の材料となる<sup>(42)</sup>。

以下に『孝經』原文で「つかへる」を意味する「事」が含まれる文とそのモンゴル語訳をいくつか示す。

(19) a. 夫孝始於事親，中於事君，終於立身。

b. *taqimtaġu keṃe-ḃesü aṅg türün ečige eke-deġen tabigla-qu, nököġe inu*  
 孝 と言ふ-COND まず 父母-DAT.REFL 仕へる-P.NPST 次 3SG.GEN  
*qan kümün-e čing ün-en-iyer küčü öġ-kü eden-i büütüġe-n čida-ḃasu,*  
 主君-DAT 忠-INST 仕へる-P.NPST これ.PL-ACC 實行する-CNJ できる-COND  
*yabudal-ıyan orosiġul-qu-yin ečüs inu ene bol-u.*  
 行なひ-REFL 立てる-P.NPST-GEN 終はり 3SG.GEN これ なる-NPST

「孝とは、まず親に仕へ、その次に主君に忠實に仕へて、これらのことを實踐することができれば、身を立てることの完成となる、まさにこのやうなものである。」【§1, 2v:5-3r:3】

(20) a. 故以孝事君則忠。以敬事長則順。

b. *taqimtaġu törö-ḃer qan-dur küčü öġ-besü čing ün-en sedkil bol-u.*  
 孝なる 道理-INST 主君-DAT 仕へる-COND 忠なる 心 なる-NPST  
*kündüle-kü törö-ḃer öḃer-ečeġen yeke-s-tür tabigla-ḃasu joqidag bol-u.*  
 敬ふ-P.NPST 道理-INST 自分-ABL.REFL 年長者-PL-DAT 仕へる-COND 順 なる-NPST

「孝行に主君に仕へれば忠誠である。敬重に自分より年長の者に仕へれば従順である。」【§5, 8v:3-8v:7】

(21) a. 昔者，明王事父孝故事天明。事母孝故事地察。

b. *erten-ü gegeġen qa-d ečige-deġen tabigla-gsan taqimtaġu törö-eče ulam*  
 昔-GEN 賢明な 主君-PL 父-DAT.REFL 仕へる-P.NPST 孝なる 道理-ABL

(42) モンゴル語訳『孝經』については、de Rachewiltz [1982: 14-27]、栗林 [2014: 1-4] 等。

*tngrī-yi taqi-qu törö temdegtej-e uqa-juču. eke-değen tabigla-gsan*  
 天-ACC 仕へる-P.NPST 道理 明確な-DAT 理解する-IND.PST 母-DAT.REFL 仕へる-P.PST

*taqimtaču törö-eče ulam ötegen eke-yi taqi-qu törö qagaraqaj-a*  
 孝なる 道理-ABL 地 母-ACC 仕へる-P.NPST 道理 明確な-DAT

*bolga-juču.*

注視する-IND.PST

「昔の明君は父に仕へた孝行のおかげで天神に仕へる道理を明察できた。母に仕へた孝行のおかげで地祇に仕へる道理を明察できた。」【§16, 31v:4-32r:3】

モンゴル語譯『孝經』では漢語の「事」（つかへる）に對してその意味内容に即した譯し分けがなされ、原則として次の3つの譯語が使ひ分けられる。

- (22) i. 主君に奉仕する 與格名詞 + *kücü ög-*  
 ii. 親、年長者に奉仕する 與格名詞 + *tabigla-*  
 iii. 神佛、祖先に奉仕する 對格名詞または與格名詞 + *taqi-*

このうち、(22ii) *tabigla-*「奉仕する」は名詞 *tabig* に動詞派生接尾辭 *-la-* を附したもので、*tabig* はテュルク語 *tapıy*「奉仕」(< *tap-*「仕へる、奉仕する」) [Clauson 1972: 435, 437, Наделяев и др. 1969: 533, 534] に由來する。また、(22iii) *taqi-* (WMo. *taki-*) は「祀る」の意である。興味深いのが (22i) *kücü ög-* で、この表現は他の中期モンゴル語文獻でも主君に仕へることを表はすのに用ゐられる。ここでは『元朝秘史』からの用例を1例だけ示す。

(23) 成吉思<sup>中</sup>合罕納 古出 幹<sub>克</sub>速客延 亦<sup>舌</sup>列罷<sup>原作</sup>  
 太祖 皇帝行 氣力 與 麼道 來了  
 “*Činggis qahan-na gücü ög-sü ke’e-n ire-be.*”  
 チンギス可汗-DAT 仕へる-OPT.1SG と言ふ-MOD 來る-DIR.PST.M

「『チンギス可汗に仕へようとして來ました。』」【§149, 05:07:04】

傍譯に「氣力 與」とあることから明らかなやうに、*kücü ög-* は逐語的には「力を與へる」の意である。Cleaves [1982: 87] は、モンゴル語の *kücü ög-* をテュルク語の *küč bër-* [Наделяев и др. 1969: 323] のカルク（翻譯借用）とする。ただし、突厥碑文ではむしろ連語 *is küč* を含む *išig küčüg bër-* といふ表現がよく見られる [Clauson 1972: 254, Наделяев и др. 1969: 214]。

(24) “*nä qayan-qa iš-ig kũč-üg bēr-iür män?*”  
 何の 可汗-DAT つとめ-ACC 力-ACC 與へる-P.NPST 1SG

『私はどの可汗に仕へるべきだらう?』【KT E9, BQ E9】<sup>(43)</sup>

(25) “*yičä iš-ig kũč-üg bēr-gil.*”  
 以前のやうに つとめ-ACC 力-ACC 與へる-IMP.2SG

『以前のやうに（私に）仕へよ。』【ŠU E5】<sup>(44)</sup>

なほ、モンゴル語の *küčü(n)* はテュルク語 *kũč* からの借用語であり [Clauson 1972: 693], トゥングース諸語へも借用されてゐる（明代女真語 *husun*, 満洲文語 *husun*）。

#### 4. 「几卡」*kūs* の意味

前節では、中期モンゴル語で主君に仕へることを *küčü ög-* と表現し、それは逐語譯すれば「力を與へる」との意味であることをみた。

すでに述べたやうに、契丹語で「仕へる」を表はす「几卡 尺-」*kūs uy<sup>w</sup>-* は「*kūs* (を) 與へる」といふ意味である。中期モンゴル語の表現を考慮に入れるならば、「几卡」*kūs* が「力」を意味する名詞であると推定するのは至極當然であらう。

この假説は『遼史』の記事によつて裏附けることができる。

(26) a. 朗，字歐新，季父房罽古只之孫。性輕佻，多力，人呼爲「虎斯」。

【『遼史』卷 113 「耶律朗傳」】

b. 虎思 斡魯朶 「思」亦作「斯」，有力 稱。「斡魯朶」，宮帳名。

【『遼史』卷 116 「國語解」天祚帝紀】

c. 虎斯 有力 稱。紀言「虎思」，義同。

【『遼史』卷 116 「國語解」諸功臣傳】

これらの記事は、契丹語で「力」を「虎斯」\**xu.sĩ*，「虎思」\**xu.sĩ* と言つたことを示してゐる [白鳥 1913: 12 = 白鳥 1970:273f, 孫伯君、聶鴻音 2008: 70]。

一方、契丹小字「几卡」<*kū-us*> が表はす音韻は /*kūs*/ である。

豊田 [1986a: 15f, 1991c: 110] は、語「几」が「人」を意味すると推定し、MMo. *kü'ü(n)* (WMo. *küimün*) との同源語とみなして「几」を「kü'ün」と読み、のちに即實 [1996: 657] はその推定を認めつつ、語「几火女」<[-*uy<sup>w</sup>-ur*> が「控骨里」\**kuŋ.gu.li* と音譯される人名

(43) Clauson [1972: 774] 等を参照。

(44) Clauson [1972: 354] および Малов [1959: 30-44], 森安ほか [2009] 等を参照。

に對應すること、韻文中で字素「ㄨ」<*ü*>等と脚韻を踏むことから、字素「ㄨ」には子音 *n* が含まれず、[k'u] と読み改めるべきことを論じた。

また、字素「ㄨ」は、語「ㄨㄨㄨ」<(e)š-*eu*-[ ]> が漢語「露」に對應することから MMo. *ši'üderi(n)*, WMo. *sigüderi*, Mong. *šüder* との同源語とみなされ、長らくその音價を「dər」等と推定されてゐた [劉鳳翥、于寶麟 1977: 89, 卽實 1982: 60] が、のちに語「ㄨㄨㄨ」<*pū*-[ ]-*uy*<sup>w</sup>-*ēr*> が「蒲速里」\**pu.su.li* と音譯される人名に對應することが判明し [袁海波、劉鳳翥 2005: 211<sup>(45)</sup>, 愛新覺羅 2004: 185], 字素「ㄨ」に子音 *s* が含まれることが明らかになった。その場合でも「ㄨㄨㄨ」を *šeys* と読んで WMo. *sigüsü(n)*, Mong. *šüs* 「液汁」の同源語とみることができ、齟齬を來さない [吳英喆 2007: 100]。

さらに、契丹語文獻では非男性母音の前で漢語の有氣軟口蓋破裂音 *k-* と軟口蓋摩擦音 *x-* とを共に音素 /k/ を含む字素で寫すことから、契丹語には前部軟口蓋音に破裂音 [k] と摩擦音 [x] との音素的對立がなかつたとみられる [Takeuchi 2011]<sup>(46)</sup>。

以上のことから、契丹小字によつて「ㄨㄨ」&#x2D;と表記される語と、「虎斯」または「虎思」と漢字音寫される語が同一である蓋然性は極めて大きく、これによつて「ㄨㄨ」が「力」を意味するとする假説は保證される。

「ㄨㄨ」*kūs* が「力」を意味するならば、その音義兩面の類似性から、*kūs* をモンゴル語 *küčü(n)* の同源語とみることができ [白鳥 1912: 23f = 白鳥 1970: 222, 白鳥 1913: 12 = 白鳥 1970: 273f, 孫伯君、聶鴻音 2008: 70]<sup>(47)</sup>。また、この同源關係を認めることにより、「ㄨㄨ ㄨ」*kūs uy*<sup>w</sup> が「仕へる」を意味するといふ假説も中期モンゴル語の同源語による同義表現によつて裏付けられる。ただし、中期モンゴル語の *küčü ög-* は主君に奉仕することを言ふのに對し、契丹語の「ㄨㄨ ㄨ」*kūs uy*<sup>w</sup> は主君だけでなく親らに奉仕することを表しうるといふ點でより廣汎な概念を表はしたらしい。

## 5. まとめ

本稿の論旨をまとめる。

第1節では、「ㄨㄨ ㄨ」*kūs uy*<sup>w</sup> が表はす意味について論じた。ある先行研究は「側近くに仕へる」と解釋する假説を提出してゐるが、その論據が誤りであること、文脈上そのやうに解釋できない例が存在することを示して反證した。別の先行研究は「仕へる」と譯すが、その假説は支持されるべきであり、他の文例から、主君だけでなく親らに奉仕することを言ひ表はしうることを指摘した。

第2節では、「ㄨㄨ ㄨ」*kūs uy*<sup>w</sup> の語構成について論じた。「ㄨ」*uy*<sup>w</sup> については先行研究が「與へる」を意味するとする假説を提出してをり、それを支持する論據を示した。一方、「ㄨㄨ」*kūs* については先行研究が「官職」を意味するとする假説を提出してゐるが、

(45) 袁海波、劉鳳翥 [2005] では「ㄨㄨㄨ」を誤まつて「ㄨㄨㄨ」&#x2D;と認識してゐる。

(46) 契丹語の音素 /k/ が結局如何なる音聲的實現をしてゐたのかは今のところ定かではない。

(47) 契丹語における語中の \**č* > *s* が規則的な音變化であるかは現段階では他に例がなく判斷できない。

そのやうな意味を假定すると文意が通じないことを述べて反證した。

「几卡」*kūs* の意味についての代案を提示する前に、第3節で中期モンゴル語において主君に仕へることを *küčü ög-* と表現することを漢蒙對譯文獻『孝經』を用ゐて示し、その動詞句が逐語的には「力を與へる」を意味することを蒙漢對譯文獻『元朝祕史』を用ゐて示した。

第4節では契丹語「几卡 尺-」*kūs uy<sup>w</sup>-* とモンゴル語 *küčü ög-* との竝行性から、「几卡」*kūs* が「力」を意味するとの示唆が得られることを述べ、この假説が『遼史』の記事によつて裏付けられることを示した。「几卡」*kūs* をモンゴル語 *küčü(n)* の同源語と認めたことにより、「几卡 尺-」*kūs uy<sup>w</sup>-* が「仕へる」を意味することも裏付けられた。

以上により、「几卡」*kūs* が「力」を意味する、モンゴル語 *küčü* と同源の名詞であり、動詞句「几卡 尺-」*kūs uy<sup>w</sup>-* が中期モンゴル語の *küčü ög-* と同じ語構成をもつほぼ同義の表現であることが明らかとなつた。本稿の意義は、モンゴル語（とりわけ中期モンゴル語）の知識が、契丹語の單語以上のレベルの解明においても重要な役割を果たすことを示したことである。契丹語とモンゴル諸語との比較研究が、今後更に實りある成果を生み出していくことを期待する。

#### 略號

ABL	奪格	GEN	屬格	NPST	非過去	PL	複數
CAUS	使役	IMP	命令	OPT	願望	PST	過去
CNJ	連結	INST	造格	ORD	序數詞	REFL	再歸
DAT	與位格	M	男性	P	形動詞	SG	單數
F	女性	NEG	否定	PASS	受動		

MMo.	中期モンゴル語	BQ	ビルゲカガン（毘伽可汗）碑文〔735年刻〕
Mong.	現代モンゴル語	KT	キョルテギン（闕特勤）碑文〔732年刻〕
OTu.	古代テュルク語	ŠU	シネウス碑文（磨延啜碑文）〔759年刻〕
WMa.	滿洲文語		
WMo.	モンゴル文語		

承規 『耶律承規（耶律迪烈）墓誌銘』〔乾統元年（1101）刻〕

高十 『耶律高十墓誌銘』〔大康2年（1076）以後刻〕

弘本妻 『耶律弘本（耶律和魯斡）妻蕭氏（宋魏國妃）墓誌銘』〔乾統10年（1110）刻〕

弘用 『耶律弘用墓誌銘』〔壽昌6年（1100）刻〕

忽突董 『蕭忽突董墓誌銘』〔大安7年（1091）刻〕

糺里 『耶律糺里墓誌銘』〔乾統2年（1102）刻〕

玦 『耶律玦墓誌銘』〔咸雍7年（1071）刻〕

- 仁先 『耶律仁先墓誌銘』〔咸雍 8 年（1072）刻〕  
 兀沒 『耶律兀沒墓誌銘』〔乾統 2 年（1102）刻〕  
 彥弼 『蕭彥弼（蕭大山）、妻耶律氏（永清公主）夫妻墓誌銘』〔壽昌元年（1095）刻〕  
 知微 『蕭知微（蕭朮哲）墓誌銘』〔乾統 7 年（1107）刻〕  
 仲恭 『蕭仲恭墓誌銘』〔天德 2 年（1150）刻〕  
 宗教 『耶律宗教墓誌銘』〔重熙 22 年（1053）刻〕

## 參考文獻

- 愛新覺羅烏拉熙春. 2002. 契丹小字的語音構擬. 『立命館文學』 577: 1-63.  
 愛新覺羅烏拉熙春. 2003. 《耶律迪烈墓誌銘》與《故耶律氏銘石》所載墓主人世系考——兼論契丹人的“名”與“字”一. 『立命館文學』 580: 1-16.  
 愛新覺羅烏拉熙春. 2004. 『契丹語言文字研究』京都：東亞歷史文化研究會.  
 愛新覺羅烏拉熙春. 2006. 『契丹文墓誌より見た遼史』京都：松香堂書店.  
 愛新覺羅烏拉熙春. 2011. 國舅夷離畢帳と耶律玦家族. 『立命館文學』 621: 29-58.  
 愛新覺羅烏拉熙春・吉本道雅. 2012. 『新出契丹史料の研究』京都：松香堂書店.  
 清格爾泰等. 1977. 關於契丹小字研究. 『內蒙古大學學報』 1977(4), 契丹小字研究專號.  
 清格爾泰等. 1978. 契丹小字解讀新探. 『考古學報』 1978(3): 353-387.  
 清格爾泰等. 1985. 『契丹小字研究』北京：中國社會科學出版社.  
 陳乃雄、楊傑. 1999. 烏日根塔拉遼墓出土的契丹小字墓誌銘考釋. 『西北民族研究』 1999(2): 72-88.  
 Clauson, Sir Gerard. 1972. *An etymological dictionary of Pre-thirteenth-century Turkish*. Oxford: At the Clarendon Press.  
 Cleaves, Francis Woodman. 1982. The first chapter of an early Mongolian version of the *Hsiao ching*, *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 36(1-3): 69-88.  
 蓋之庸等. 2008. 契丹小字《耶律副部署墓誌銘》考釋. 『內蒙古文物考古』 2008(1): 81-111.  
 卽實. 1982. 契丹小字字源舉隅. 『民族語文』 1982(3): 54-60, 11.  
 卽實. 1988a. 清宮玉卮契丹文銘補釋. 『社會科學輯刊』 1988(2): 72-76 (卽實 [1996: 270-281] に改訂收録).  
 卽實. 1988b. 從 𐰺 𐰽 𐰾 說起. 『內蒙古大學學報 (哲學社會科學版)』 1988(4): 55-69.  
 卽實. 1996. 『謎林問徑——契丹小字解讀新程』瀋陽：遼寧民族出版社.  
 卽實. 2012. 『謎田耕耘：契丹小字解讀續』瀋陽：遼寧民族出版社.  
 康鵬. 2011. 蕭撻凜家族世系考. 『新亞洲論壇』 4: 373-383.  
 栗林均. 2014. 『孝經—モンゴル語古譯本—』仙臺：東北大學東北アジア研究センター.  
 劉鳳翥. 2010. 契丹小字《耶律宗教墓誌銘》考釋. 『文史』 2010(4): 201-228.  
 劉鳳翥等. 1995. 契丹小字解讀五探. 『漢學研究』 13(2): 313-347.  
 劉鳳翥、王雲龍. 2004. 契丹大字《耶律昌允墓誌銘》之研究. 『燕京學報』 新 17: 61-99.  
 劉鳳翥、于寶麟. 1977. 契丹小字《許王墓誌》考釋. 『文物資料叢刊』 1: 88-104.

- 盧迎紅、周峰。2000。契丹小字《耶律迪烈墓誌銘》考釋。『民族語文』2000(1): 43-52.
- Малов, С. Е. 1959. *Памятники древнетюркской письменности монголии и киргизии*. Москва; Ленинград: АН СССР.
- 森安孝夫ほか。2009。シネウス碑文譯注。『内陸アジア言語の研究』24: 1-92.
- Наделяев, В. М. и др. 1969. *Древнетюркский словарь*. Ленинград: Наука.
- de Rachewiltz, Igor. 1982. The preclassical Mongolian version of the *Hsiao-ching*, *Zentralasiatische Studien* 16: 7-109.
- 白鳥庫吉。1912。東胡民族考（第九回）。『史學雜誌』23(3): 1-26 [白鳥 1970: 205-224].
- 白鳥庫吉。1913。東胡民族考（第十三回）。『史學雜誌』24(1): 17-45 [白鳥 1970: 270-294].
- 白鳥庫吉。1970。東胡民族考。『白鳥庫吉全集』第4卷。塞外民族史研究 上。東京：岩波書店，pp. 63-320（1910-13年原載）。
- 孫伯君、聶鴻音。2008。『契丹語研究』北京：中國社會科學院。
- Takeuchi Yasunori. 2011. Kitan transcriptions of Chinese velar initials, *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 64(1): 13-23.
- 豐田五郎。1986a。契丹小字についての幾つかの探索Ⅰ。1986年10月8日付未公刊手稿（「1986年 豊田五郎 契丹小字研究ノート」所収）。
- 豐田五郎。1986b。契丹小字についての幾つかの探索Ⅱ。1986年11月11日付未公刊手稿（「1986年 豊田五郎 契丹小字研究ノート」所収）。
- 豐田五郎。1990。契丹小字の方位と若干の數詞について。1990年11月付未公刊手稿。
- 豐田五郎。1991a。契丹小字《仁先（即實本）墓誌》の新釋。1991年4月29日付未公刊手稿。
- 豐田五郎。1991b。契丹小字《耶律仁先墓誌》讀後。1991年6月23日付未公刊手稿。
- 豐田五郎〔著〕，那順烏日圖〔譯〕。1991c。關於契丹小字的幾點探索。『內蒙古社會科學』1991(3): 105-114.
- 豐田五郎。2000。契丹小字の親族稱號について。『알타이학보』10: 209-219.
- 王弘力。1986。契丹小字墓誌研究。『民族語文』1986(4): 56-70.
- 吳英喆。2005。契丹小字“性”語法範疇初探。『內蒙古大學學報（人文社會科學版）』2005(3): 25-28.
- 吳英喆。2007。『契丹語靜詞語法範疇研究』呼和浩特：內蒙古大學出版社。
- 吳英喆。2012。『契丹小字新發見資料釋讀問題』府中：東京外國語大學アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 袁海波、劉鳳翥。2005。契丹小字《蕭大山和永清公主墓誌》考釋。『文史』2005(1): 207-221.
- 朱志民。1995。內蒙古敖漢旗老虎溝金代博州防禦使墓。『考古』1995(9): 802-807.